

西洋中世の動物を巡るテキストとイメージ



本研究は13世紀を中心とし、その前後の時代を射程にいれながら、西欧中世における人と動物の関係を探るものです。中世における動物論的転回が起きたともされる同時代について、二つの観点からアプローチしています。第一には表象の領域で、文学や写本挿絵における動物を巡る表現を扱っています。第二には言説の領域で、現実における人と動物との関わりや、同時代における動物を巡る規範や理論を扱っています。両者を統合することで、人間中心主義的と一般化されがちな中世の動物観について分析し、学際的にその特徴と意義を明らかにすることを目指しています。

本シンポジウムは、本研究の一年目の締めくくりとして、表象班のメンバーに加えて、中世末期の狩猟書やタピスリーにおける動物表象を研究している高木麻紀子氏をゲストに呼んで、初年度の研究報告をするものです。それぞれの研究の進捗状況を報告した後、本研究言説班のメンバー、会場の参加者と討論を行います。

プログラム

主催者挨拶

第一部 西洋中世のテキストに見られる動物

高名康文（成城大学）「『狐物語』に見られる動物表現——マルタン版の校訂を再検討しながら」

吉川育（成城大学）「オウィディウス『変身物語』における動物表象——中世との接続を探る」

第二部 西洋中世のイメージに見られる動物

長友瑞絵（東京藝術大学大学美術館）「13世紀イングランドの『動物寓意集』——新たなリアリティとシンボリズム」

高木麻紀子（明治学院大学）「天翔ける鹿——中世末期のフランス宮廷美術における動物表象」

第三部 全体討論

2025年3月29日（土）13:00～16:30（開場12:30）

成城大学3号館312教室 入場無料・要事前登録



事前登録はこちらから

主催：科学研究費基盤研究(C)「13世紀前後の西欧における人、動物、動物表象の関係性を巡る学際的研究」（課題番号：24K03801）表象班／連絡先：takana.y.colloque@gmail.com